NEWS
The Kagawa Museum

vol.52
香川県立ミュージアム
ニュース
2021　春号

Contents

特集
特別展
「空間に生きる画家　猪熊弦一郎
―民主主義の生活空間と造形の試み」

調査研究ノート vol.39
讃岐の石文化
―石舟の石工文化を中心に―

トピック
香川県美術展覧会
―これまでの県展と、これからのケンテン―

ミュージアムガイダンスvol.41
変化する常設展示

収蔵品紹介
長町竹石・画 柴野栗山・賛　《山水図》

展示室だより
20世紀の美術Ⅰ―人物・風景・静物

れきみんだより
「ため池絵図」の地を歩く

©The MIMOCA Foundation

猪熊 弦一郎　《太陽の環境》
1960年　油彩・カンヴァス　177.8×203.2cm　香川県立ミュージアム蔵

猪熊は戦後、新しい時代の芸術には大きな空間が必要だと考え、建築を志向し、壁画や家具デザインを手掛けました。その後ニューヨークに渡って描き始めた抽象絵画は、造形から離れ、大きなサイズに変わっていきます。本作もそのような作品のひとつ。幅2メートル超の大画面は、まるで壁画のように、作品の中だけでなく展示空間にまでも存在感を示します。

特集

特別展「空間に生きる画家　猪熊弦一郎―民主主義の生活空間と造形の試み」

7-1

1　猪熊弦一郎
三越包装紙《華ひらく》1950年

2　猪熊弦一郎
《着物》1955年以前　個人蔵

3　猪熊弦一郎
《秩序と町》1964年　当館蔵

4　中西利雄
《中里風景》1946年　個人蔵

5　猪熊弦一郎
《戦時中スケッチ》1945年頃
丸亀市猪熊弦一郎現代美術館蔵

6　猪熊邸でのデッサン会
1945～55年頃
丸亀市猪熊弦一郎現代美術館蔵

1

2

3

4

6

猪熊弦一郎（1902～1993）は香川県に生まれ育ち、20世紀を通して活躍した画家です。特に戦後すぐの時期には建築やデザインへの強い関心を持ちました。猪熊は「僕は自分で建築をやり、家具も何も全部を総合したものが作りたい。（略）そういう大きな立体をやりたい。けれども、それは絶対に一人の力ではできないのです。」※と語り、生活空間や協働にも関わる総合芸術を新しい時代に求めたのです。「空間」と「生活」のふたつのテーマが響きあうような展覧会をご紹介します。 ※佐波甫「猪熊弦一郎氏と語る」『教育美術』12巻1号（1951年1月号）16頁

提示部
平面であり立体でもある作品たち

1950年に猪熊がデザインした三越包装紙《華ひらく》（図1）。さまざまな形の箱を包んで試作を重ねたこの作品は、平面デザインでありながら包むと立体になることを想定しています。他にも猪熊は風呂敷、着物（図2）などを手掛けました。渡米後、1960年代半ば以降には都市をテーマに大きなカンヴァス作品を描きます（図3）。都市空間をぎゅっと平面に入れ込んだような抽象絵画には、猪熊が持つ卓越した空間認識力が発揮されています。

展開部　背景をひもとく

東京美術学校（現・東京藝術大学）在学中から頭角を現していた猪熊は、制度改革で画壇が混乱する中、1936年に数少ない同志と新制作派協会を結成します。38年には念願のパリ行きを果たし、画家の藤田嗣治と交友を深めました。しかし第二次世界大戦が激化し、やむなく帰国。44年に神奈川県の藤野（現・相模原市緑区藤野）へ疎開し、新制作派の画家仲間たちと暮らします。藤野に今も残る彼らの作品（図4）と猪熊のスケッチ（図5）からは、当時の生活がうかがえます。

そして戦後、やっと訪れた平和な時代。つらい戦争体験を経た猪熊は、芸術の力で人々の心を明るくしようと、画家というよりむしろ文化人として、生活の中に芸術があることの大切さを語ります。そして、デッサン教室やダンスパーティーなど、人と人が楽しく交流しながら芸術に触れられる場を生みだしました（図6）。また、妻・猪熊文子の公私にわたる活躍にも注目します。

再現部　空間に生きる

猪熊の尽力により1949年に設立した新制作派協会建築部は、翌50年の神戸博でさっそく会場プランとパビリオン設計の一部を担いました。また、猪熊の壁画第一作《デモクラシー》（図7）は建築部会員の建築家・谷口吉郎が設計した慶應義塾大学校舎のための作品で、谷口はこの大学建築群を交響詩になぞらえ、建築と絵画・彫刻との協働を謳いました。焼け跡の傍ら、学生達とともに猪熊が制作した壁画は複数人で塗りやすい平坦な画風になり、その2年後には上野駅壁画《自由》（1951）が完成します。分野を超えた、共同制作による、権威のためではなく学生や公衆のためにある作品――これらすべてが、

7-1　猪熊弦一郎
7-2　慶應義塾大学学生ホール壁画
《デモクラシー》1949年
慶應義塾大学蔵　※写真、複製のみ展示

8　猪熊弦一郎
《バナナ》1950年　当館蔵

9　猪熊弦一郎
《洞窟壁画スケッチ》1939年
丸亀市猪熊弦一郎現代美術館蔵　初公開

10　猪熊弦一郎
《埴輪4》1956年　当館蔵

特別展
壁画《デモクラシー》原寸大複製

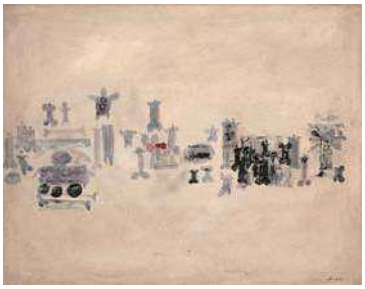
猪熊の後輩・香川県立丸亀高等学校の生徒たちが2枚組のうち1点（図7-2）を原寸大で複製し、会期中に展示します。

7-2

5

8

9


10

戦後の民主主義時代に即した新しい芸術のあり方でした。壁画の画風は同時代のカンヴァス作品にも転用されます（図8）。

また大画面体験のルーツを遡（さかのぼ）り、彫刻家の従兄・中村武平、若い頃の大型作品、フランスで藤田と見た洞窟壁画（図9）など、猪熊の壁画制作につながる多様な経験を掘り下げます。そして猪熊が晩年に至るまで手掛けた多くの壁画や建築関連作の中から、香川県庁舎壁画《和敬清寂（わけいせいじゃく）》（1958）と香川県県民ホール壁画《21世紀に贈るメッセージ》（1988）をご紹介します。

さらに猪熊は、すべて芸術は生活に結びつくべきという考えのもと、様々な仕事に関わります。家が近所で戦前から親しかった建築家の山口文象は、戦時中には藤野に通って疎開画家と語りあい、終戦直後から建築部創設に尽力しただけでなく、猪熊の紹介で猪熊に縁のある建築作品「高松近代美術館」（1948）と「久が原教会」（1950）を設計しました。また、猪熊は1950年代前半までに、家具デザインや舞台美術など生活や空間にかかわる作品を多く手掛けました。

終結部　空間につつまれて

渡米以降1960年代前半までの、ざらついたマチエール（絵肌）が特徴の抽象絵画を紹介します（図10、表紙）。この特徴は石や土の質感を思わせ、素材をそのまま生かす美は茶道や近代デザインにも通じます。猪熊はこの抽象表現によって、描く対象ではなく絵画自体の質感を表し、大きな絵画平面が額縁の中にとどまらず展示空間に直接はたらきかける、絵画の新しいあり方を見出したのです。

猪熊は空間をとらえる優れた感覚の持ち主でした。だからこそ、画家でありながら、様々な芸術分野に携わり、やがて新しい手法をもって絵画表現を切り拓くことができたのでしょう。

特別展「空間に生きる画家 猪熊弦一郎 ―民主主義の生活空間と造形の試み」は初公開作品を含む約300点の資料・作品を一堂に展示する、ミュージアム初の猪熊弦一郎個展です。ぜひご覧ください。

（専門学芸員　一柳　友子）

特別展
空間に生きる画家　猪熊弦一郎
―民主主義の生活空間と造形の試み
4月17日（土）～6月6日（日）

会場
特別展示室及び常設展示室4・5

開館時間
9:00～17:00（入館は閉館の30分前まで）
※会期中毎週土曜日と5月2日（日）、3日（月・祝）、4日（火・祝）は19:30まで開館

休館日
月曜日 ※5月3日（月・祝）は開館

観覧料
1,100円、前売・団体：900円
※高校生以下、65歳以上、身体障害者手帳等をお持ちの方は無料
※5月18日（火）は「国際博物館の日」につき無料

図1、4、6以外は全て©The MIMOCA Foundation
図1、7は高橋章撮影

Notes for Research

調査研究ノートvol.39

讃岐の石文化 ―石舟の石工文化を中心に―

現在香川では、庵治石を代表とする花崗岩が有名ですが、かつては県内各地域において、多様な石の採掘・加工が行われてきた豊かな石の文化が存在しました。その1つの例として挙げられるのが、石積アーチ橋です。

石積アーチ橋とは

石積アーチ構造は、世界的には、古代ローマのコロッセウムや水道橋などに古くから使われた構造ですが、日本に伝わったのは江戸時代で、明の渡来僧・如定(にょじょう)により架けられた長崎の眼鏡橋が最初とされています。その後も九州地方を中心として、いくつかのアーチ橋が架けられましたが、特定の石工集団の秘法とされ、全国に一般化するには至りませんでした。アーチ構造物が全国規模で普及するのは明治時代以降です。

香川の石積アーチ橋

香川では、明治時代に5基の石積アーチ橋がつくられたことがわかっています。明治25(1892)年、坂出に「両景橋(りょうけいばし)」(図1)がつくられました。昭和21(1946)年に取り壊され、現在では写真でその姿を残すのみです。写真からはその工法は江戸時代に九州を中心に発展した石積アーチ橋に似ているように感じますが、一方で、存在感のある要石(アーチの天端に位置するアーチ全体を引き締める役割の石でキーストーンとも呼ばれる)は近代的な感じを与えます。

図1 「坂出 両景橋」 坂出市史編さん所蔵

続いてつくられた石積アーチ橋は明治30(1897)年に開通した讃岐鉄道の高松―丸亀間の橋梁です。2基の石積アーチ橋が今も現存しています。1つは宇多津の「岩屋架道橋(いわやかどうきょう)」(図2)、もう1つはJR鬼無駅付近の拱渠(こうきょ)(線路を敷く際に、土手を築いてその下に従来の道路や水路を通すためのアーチ)で現在も使用されている現役のアーチ橋(図3)です。鉄道に用いられるアーチ構造では、アーチ部分にレンガが用いられるのが主流です。香川と同様の石材による拱渠は、山梨・長野県下の中央本線や九州の鹿児島本線などで認められるにとどまります。特に鬼無のアーチ橋は土台部分がレンガ造り、アーチ部分が石積みとなっており、通常の構造と逆になっている点が大変興味深いです。その理由としては、江戸時代から良質の花崗岩の産地であった香川では、レンガよりも石材が安価であったこと、加えて県下で高度な石材加工技術を有した石工職人が存在していたからといえるのではないでしょうか。

図2 「岩屋架道橋」

図3 「JR鬼無駅付近の拱渠」

鷲ノ山石製の2基の石積アーチ橋

明治34(1901)年に、高松市国分寺町石舟地区(以下、石舟)に総石造りの「石舟眼鏡橋」(図4)が、明治42(1909)年には、石舟地区からさらに南に進んだ、綾川町陶(すえ)に「陶眼鏡橋」(図5)がつくられました。2つの眼鏡橋はいずれも鷲ノ山(わしのやま)石でできており、スパンドレル(アーチの左右上部の三角小間(こま)の部分)が布積み(※)である点から近代土木技術の影響を受けていると推測されます。一方で要石の部分に伝統的な彫り物が細工されており、日本でも大変珍しい土木建造物といえます。

石舟の眼鏡橋には、製作年と、製作者名が彫られており、製作者は兎子尾与次郎(としおよじろう)と米吉で、彼らは石舟の石工です。製作年と構造から推測すると、讃岐鉄道のアーチ構造物に影響を受けたものと考えられます。当時日本でも例が少なく、高度な技術を要する石積アーチ構造物が石舟石工によってつくられたのはなぜでしょう。明治以降、近代化とともに石材が建築物や土木建造物に用いられるようになると、石舟の石工たちは江戸時代からの伝統的石細工に加えて、積極的に新たな石材の活用法に取り組み、活路を見出そうとしたからと言えるのではないでしょうか。

(専門職員　酒井　将年)

※四角く加工した切石をレンガのように組み合わせながら石を積む方法。

図4 「石舟アーチ橋(石舟眼鏡橋)」
四国民家博物館に移築

図5 「陶の眼鏡橋」

|関|連|展|覧|会|

常設展示室1

讃岐の石文化―石舟の石工文化を中心に―

2月19日(金)～4月11日(日)

Topic
トピック

香川県美術展覧会 ―これまでの県展と、これからのケンテン―

香川県美術展覧会（以下、県展）が、令和2年度はコロナ禍で中止となりましたが、次年度の開催に向けて準備を進めています。

県展の当初の目的は、中央で活躍する県出身作家の活躍ぶりを県民に紹介し、郷土の美術工芸に刺激を与え、若い作家を育てるというものでした。この目的は現在も受け継がれています。長く続く県展は、後年「アート県かがわ」を生み出す土壌の一つとなりました。県展で実力をつけ中央へ進出する作家もおり、質の高い作品は多くの観覧者を魅了しました。つくる人もみる人も、共に育ってきたのが県展です。

しかし、社会は変わり多様性の時代となります。公募展での受賞に価値を求めない人も増えています。今、県展を支えているのは、まだ公募展が元気だった時代に受賞し、その経歴を持って活躍の場を求めた世代の人たちです。

30歳代や40歳代のクリエーターたちは、そのようなステップアップは、まどろっこしく、もっと自由な表現の場を求めているのかもしれません。

県展は、次の課題を抱えています。

①出品者の高齢化と若年層の県展離れ

②出品者の減少

これらの課題を解決するため、実行委員会では議論を重ねています。以下、現在検討しているこれからの県展のすがたを示します。

県展の改革案

1. これからの県展の理念

【理念】

多様な制作活動を行う人々が、作品を競い合うために集い、その成果を鑑賞者とともに共有することで、香川を舞台にした確かな、そして活力ある芸術文化を創り上げる。このために、香川県美術展覧会を開催する。

この展覧会が、創作活動の担い手を育む場として、自由な制作表現を尊重し、既成概念にとらわれない作品への評価に取り組み、常に「美術とは何か」を再確認できる取り組みを継続する

【理念を実現するための基本方針】

方針1　既存6部門の枠にとどまらない、現代美術も含めた多様・多彩な表現をも受け入れる姿勢と方策を示す。

方針2　フェスティバルではなく、厳正な審査を経るコンクール的性格を明確にする。

方針3　審査の考え方や審査内容を、制作者・鑑賞者に還元・共有する仕組みを作る。

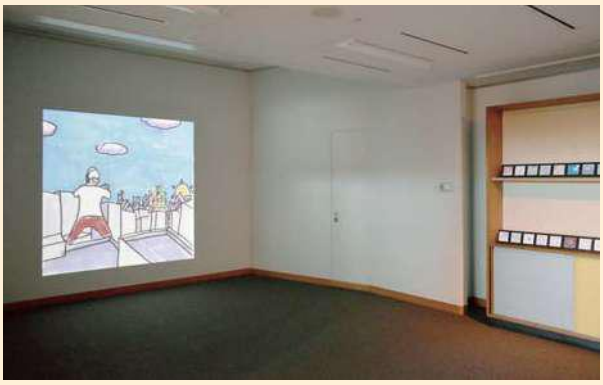
方針4　県と制作者、県民との協働による継続的な運営を進める。

方針5　県の他の文化芸術事業と連携し、県展からステップアップできる場を用意する。

方針6　幅広い年齢層の人々が集まる機会を提供し、美術に親しむ場となる展覧会を目指す。

昨年のロビー展（会期：2020年10月24日（土）～12月13日（日））では県展の歴史を振り返ると同時に、アンケート結果を掲示し、今後の県展の在り方を探りました。

県展創設期の主要人物の多くが、香川県工芸学校（現・高松工芸高等学校）の卒業生であることに因み、美術科2年生に新しい美術表現の在り方を探ってもらいました。



（主任専門職員　櫻木　拓）

ミュージアムガイダンスvol.41

変化する常設展示

当館の常設展示には、3階の歴史展示室と2階の常設展示室1～5があります。香川県の通史を展示する歴史展示室については、大きな展示替えはありませんが、常設展示室は、弘法大師空海の生涯と事績をたどる常設展示室3（空海室）を除き、1～2ヶ月ごとに展示替えを行い、テーマ展を開催しています。「常設」というと、“いつも同じで変わらない”というイメージを持たれるかもしれませんが、何度来ても新しい展示が見られる、魅力ある常設展示を目指しています。常設展示室で開催するテーマ展は、収蔵する資料・作品を中心に企画を考えます。32万点を超える収蔵品を公開し、多く人に見ていただく機会として、館の活動の中でも重要なものです。

年間10回以上開催する常設展では、特別展のように図録を制作することは難しいですが、展示内容をより深く知っていただき、会期終了後も展覧会の記録やその準備過程で得られた調査研究の成果を残していくため、開催ごとに、2～4ページの展示解説シートを発行しています。これまで、前身の香川県歴史博物館で138号、美術部門を統合してミュージアムになってから116号（2020年12月末現在）を発行してきました。過去のシートを見ると、幅広い資料・作品を収蔵する当館の特徴や、調査研究の蓄積がわかります。

解説シート

解説シートは、各展示室の入口に設置し、自由にお持ち帰りいただけます。また、在庫があるものについてはバックナンバーをお渡しすることもできます。見逃した展示や、興味のあるテーマの解説シートを是非手に取ってみてください。展示資料・作品の写真や解説が掲載されたシートは、手軽に香川の歴史や美術を知るツールとしても活用できると思います。

特別展だけでなく、“変化する常設展示”や解説シートにもご注目ください。

（学芸課長　野村　美紀）

収蔵品紹介

長町竹石・画 柴野栗山・賛《山水図》

享和2（1802）年

縦長の画面にすっと伸びる木々、その奥には霞がかった山々が描かれます。縦長の構図や手前に橋を渡る人を配置することによって、木々の大きさや山の高さが際立ちます。

讃岐を代表する文人画家・長町竹石による本作は、同郷の儒学者・柴野栗山が賛を書いており、讃岐の文化人たちの交流の様子をうかがうことができます。

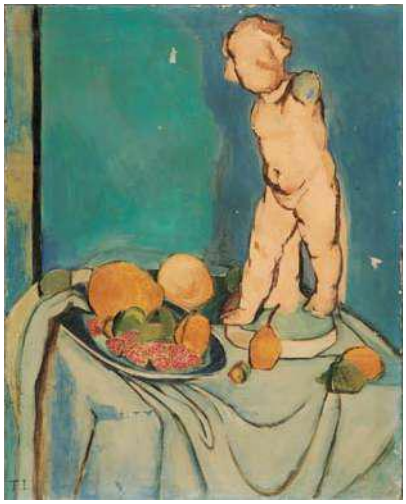
（主任学芸員　鹿間　里奈）

前期
4月16日（金）～5月23日（日）展示

関連展覧会

常設展示室1
「描いて、眺めて 讃岐の文人画」
4月16日（金）～6月27日（日）

展示室だより



井上孟
《アムールのある静物》
1935年　当館蔵

収蔵品から、特別展にちなみ、猪熊弦一郎が生きた時代の西洋の作家―ルオー、ヴラマンク、ピカソ、ブラック―と香川ゆかりの作家―藤川勇造、白川一郎、井上孟―の作品を展示します。

（学芸員　日置　瑶子）

展覧会情報

常設展示室2
「アート・コレクション 20世紀の美術Ⅰ ―人物・風景・静物」
3月30日（火）～6月27日（日）

れきみんだより

「ため池絵図」の地を歩く

【江戸時代のため池事情】

香川県は温暖少雨で大きな河川が少ないため古来より、たびたび水不足に悩まされてきました。江戸時代に入ると土地の開発が進み、耕地面積はそれまでと比べ格段に増大しました。それに伴い県内各地で、ため池の新造やかさ上げが行われるなどして用水確保の動きが高まりました。このような池普請の際には、村役人から藩へ普請を申し出るまでの経緯を詳細に記した文書が提出されました。そのため庄屋役を勤めた家資料の中には、多くのため池に関する資料が含まれており、当時のため池事情を知る事ができます。

【那珂郡吉野上邑木之崎新池絵図】

まんのう町の庄屋役を勤めた家の資料群中に江戸時代に作成された「那珂郡吉野上邑木之崎新池絵図」がのこされています。この絵図は吉野上村木ノ崎（現：まんのう町吉野）の地に新池を築造するために作成されたものと思われます。絵図内の朱引線内の田畑には、田畑の等級や広さを記すとともに「指上地」の文字が複数見られます。このことから、築造予定地に含まれる私有田畑を藩に差し出し、新たに池を築こうとしていたことがわかります。

絵図下部には、池の取水施設である「揺」の文字が見え、「朱引新池揺尻井手」とあり、この場所から池の水が下流域の田畑へ配水されることを示しています。また「此所台目」とあり増水の際、池の水をオーバーフローさせる「余水吐」がこの場所に造られることを記しています。このようにこの絵図から新たに池を新造し、新池周辺の田畑への配水を増大させようとする動きがあったことがわかります。ところが現在、地図でこの新池を見つけることはできません。また明治39（1906）年に測図された地図にもこの新池の記載はありません。ほかの資料からも、この絵図作成後の新池に関する記録類を見つけることができず、その後、新池はどうなったのかわかりません。そこで実際に現地を訪れてみました。

【現地調査】

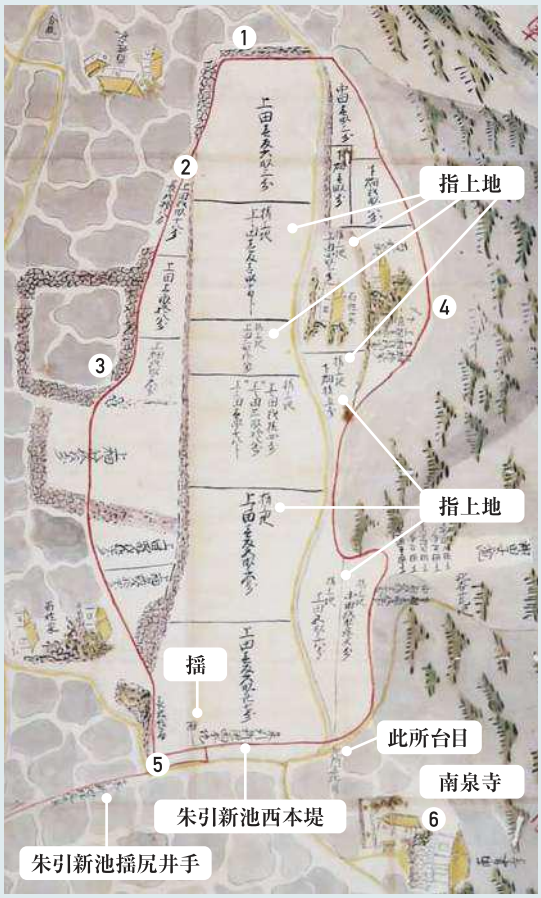
現地の地形を観察すると、山の稜線や田畑の形が絵図に描かれている様相とほぼ同じであり、絵図上に描かれている新池の姿を容易に想像することができます。

新池付近の住民複数の方に聞き取り調査をしたところ、この地に池があったことは父祖の代から伝えられてきており、現在はなくなってしまったがかつて大きな石が一つありそこがかつての池の揺があった場所、現在の墓地や田畑の土留めに使用されている石はかつて池の中や周辺にあった石を再利用したもの、新池は水がすぐに浸透し抜けてしまい池としては不適であり田畑に戻したなどの話を聞くことができました。

以上のことから、この新池は築造されたものの池として機能していた期間は短かったものと思われます。

この絵図からは、用水の確保を試み奔走した先人たちの労苦を垣間見ることができます。

（主任専門職員　芳澤　直起）



「那珂郡吉野上邑木之崎新池絵図」 香川県立ミュージアム蔵

※絵図中の数字や白矢印・白四角の文字は筆者の記載。
※取水施設を意味する「ユル」の字は本文中では「揺」とした。

INFORMATION［2021.3―2021.6］

特別展「空間に生きる画家　猪熊弦一郎」関連行事

講演会　聴講無料・要事前申込

◎「開かれた空間　1950年前後の芸術的可能性」

終戦を迎えた時代。新たな表現が求められる中、猪熊弦一郎もまた「空間」を探求したことについてお話しいただきます。

日　　時：5月2日（日）13：30～15：00
場　　所：地下1階　講堂
講　　師：水沢勉氏（神奈川県立近代美術館館長、当館展示企画アドバイザー）
定　　員：100名（先着順）
申込期間：4月2日（金）～、定員になり次第終了。

トークイベント　聴講無料・要事前申込

◎「猪熊弦一郎の交友録」

東京、NY、高松美術館にまつわる猪熊の人間模様を地元学芸員たちが語ります。

日　　時：5月15日（土）13：30～15：00
場　　所：地下1階　講堂
講　　師：古野華奈子氏（丸亀市猪熊弦一郎現代美術館学芸員）、
　　牧野裕二氏（高松市美術館学芸員）、一柳友子（当館専門学芸員）
定　　員：100名（先着順）
申込期間：4月15日（木）～、定員になり次第終了。

学芸講座　聴講無料・要事前申込

◎「猪熊弦一郎の藤野疎開」

猪熊が画家仲間たちと過ごした疎開時代についてお話しします。

日　　時：5月29日（土）13：30～15：00
場　　所：地下1階　研修室
講　　師：一柳　友子（当館専門学芸員）
定　　員：36名（先着順）
申込期間：4月29日（木・祝）～、定員になり次第終了。

講演会、学芸講座の申込方法

電話、はがき、FAX、「かがわ電子自治体システム」(※)を利用したインターネットから。はがき、FAXの場合は氏名、電話番号、行事の名称を明記してください。
申込先：〒760-0030　高松市玉藻町5番5号　香川県立ミュージアム学芸課
TEL. 087-822-0247　FAX. 087-822-0049
関連行事は、新型コロナウイルスの感染状況によって開催方法の変更や延期・中止をする場合があります。当館HPなどで最新情報をご確認ください。

※「かがわ電子自治体システム」を利用する場合

香川県立ミュージアムホームページ右下の「関連リンク」から「【香川県】電子申請のページへ」をクリックしてください。

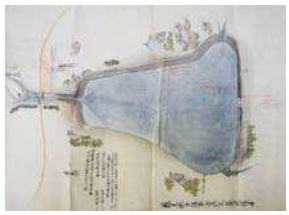
特別展会期中、壁画《デモクラシー》の原寸大複製を展示します。

製　　作：香川県立丸亀高等学校
場　　所：当館1階エントランスロビー

ほか、ワークショップなど関連イベントはホームページ、Twitterでお知らせします。

瀬戸内海歴史民俗資料館

テーマ展「かがわ水ものがたり ―ため池などにみる香川の水事情―」


「鵜足郡下法軍寺村大窪池絵図」
江戸時代後期（瀬戸内海歴史民俗資料館蔵）

ため池などの水に関する古文書や絵図、民具などから香川用水通水以前の様相を紹介するとともに、耕作地の縮小などにより、変化しつつある現在の水事情を考えます。

会　　期：3月20日（土・祝）～5月9日（日）
開館時間：9：00～17：00　※入館は16：30まで
休 館 日：月曜日（ただし、5月3日（月・祝）は開館）
観 覧 料：無料

今春、瀬戸内海歴史民俗資料館がプチリニューアル!!

令和2年9月より、第1展示室天井耐震改修などのため、第1～4展示室を閉室していましたが、ようやく工事が終わり、これを機会に一部展示構成を見直すなど、プチリニューアルして3月20日より全面再開館しました。

瀬戸内ギャラリー（第1展示室2階）

雨乞龍（第6～7展示室）

①第1展示室2階を「瀬戸内ギャラリー」（約100㎡）として開設し、「瀬戸内」をテーマに年間4回程度の企画展示を開催します。
　第1回ギャラリー展「布の力―漁民のドンザ―」3月20日（土・祝）～6月27日（日）
②第1展示室1階に「現代の香川県の漁業」のコーナーを新設しました。
③第6～7展示室に、第1展示室にあった雨乞龍が移動しました。龍を間近に見ることができます。
④第7～8展示室で、香川県の祭りや民俗芸能の映像が見られるようにしました。
⑤一部収蔵庫を開放し、国重要有形民俗文化財「西日本の背負運搬具コレクション」の一部を常時見られるようにしました（収蔵展示）。

瀬戸内海歴史民俗資料館は、令和5年11月には開館50周年を迎えます。日本建築学会作品賞受賞の建物の魅力とともに、「瀬戸内」文化を知るために、個人・団体でのますますの利用をお待ちしています。詳しくは当館まで。

お問い合わせ先：瀬戸内海歴史民俗資料館　TEL087-881-4707
https://www.pref.kagawa.lg.jp/kmuseum/setorekishi/index.html

カフェポット ミュゼ

特別展にちなみ、猪熊さんの思い出いっぱい限定メニューが登場！

営業時間：9：00～17：00
夜間開館の日は9：00～19：30
（オーダーストップ　閉館30分前）

思い出のタコス　¥1,000

ミュージアムショップ

猪熊弦一郎関連グッズや当館オリジナルグッズを販売します。

営業時間：9:00～17:00
夜間開館の日は9：00～19：30

香川県立ミュージアム
〒760-0030 高松市玉藻町5番5号
TEL.087-822-0002（代表）　FAX.087-822-0043
https://www.pref.kagawa.lg.jp/kmuseum/kmuseum/index.html

【分館】**瀬戸内海歴史民俗資料館**
〒761-8001 高松市亀水町1412-2
TEL.087-881-4707　FAX.087-881-4784
https://www.pref.kagawa.lg.jp/kmuseum/setorekishi/index.html

【分館】**香川県文化会館**
〒760-0017 高松市番町1丁目10番39号
TEL.087-831-1806　FAX.087-831-1807
https://www.pref.kagawa.lg.jp/kmuseum/kmuseum/bunkakaikan/kfvn.html

●発行日 令和3年（2021）3月10日　●編集・発行 香川県立ミュージアム　●印刷 株式会社アイコー印刷